

成澤 徳子（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

「ザンビア・農耕民トンガの子供から老人までが愉しむ酒「チブワントゥ」と その飲酒文化に関する研究」

1．はじめに

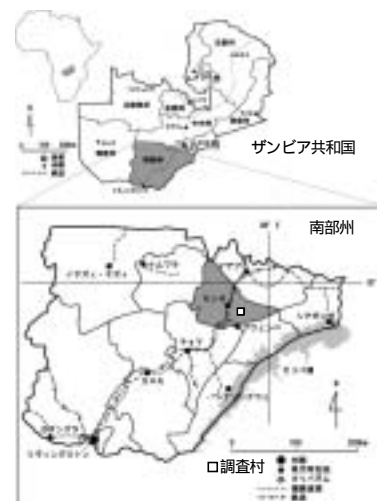
「チブワントゥ（*Chibwantu*）」は、トウモロコシと原野に自生する多様な植物の根を原料とする発酵飲料で、ザンビア南部に居住する農耕民トンガに親しまれてきた。この発酵飲料はトンガの地が発祥とされるが、ムンコヨ（*Munkoyo*）やマヘウ（*Maheu*）とも呼ばれ、ザンビア他地域でも農村部と都市部の両方で自家生産され広く飲まれている。都市に限りコップ一杯当たり500クワチャ（ザンビア通貨；1USドル 4,600クワチャ）で販売も行われる。平均2.1%程度の微量のアルコール分を含むため[Lovelace & Nyathi 1977; 米谷・宮本 1999]、先行研究では「軽い酒（light beer）」と紹介される[cf. Colson 1959]。

トンガにとって、紅茶やコーヒーは都市住民を除いて馴染みが薄い。また、トウモロコシを用いて醸造される地酒の「ガンカタ（*Gankata*）」は、子供や妊婦をはじめジェンダー規範や宗教上の理由などから飲めない／飲まない人がいる。そのなかで、誰からも親しまれ飲まれているのがチブワントゥである。

本報告では、トンガ農民によるチブワントゥの酒造と飲酒空間を事例に、清涼飲料水ともアルコール飲料ともつかない軽い酒の特徴とその機能について、酒のガンカタと比較しながら、農村を取り巻くマクロな社会経済変容のなかに位置づけて検討する。

2．トンガ社会の概要

ザンビア南部州は、植民地時代における国内北部の銅鉱山の開発及び鉄道建設を契機に、都市鉱山労働者向けの食糧供給地として、トウモロコシ生産を中心に小農の商業的農業が発展してきた地域である[児玉谷 1993]。各世帯において男女協働の換金作物生産から得る農業所得は男性が掌握し、農外所得の稼得も男性が担うなか、女性の主な現金稼得手手段はガンカタの醸造販売に限られてきた[cf. Colson & Scudder 1988]。90年代以降、市場経済化の影響や、旱魃、牛疫の発生などの影響により、人びとの農業所得が減少するとともに日常生活における現金の必要性が増大し、そのなかで現在、女性による多様な現金稼得活動が展開している。



調査地の位置

3．チブワントゥが振る舞われ、飲まれる場

チブワントゥは本来、来客に最初に差し出すことで歓迎の意を表するための、トンガの暮らしに欠かせない飲料とされ、畑仕事や病気見舞いなどにも重宝されてきた。80年代頃まで、各家庭においてチブワントゥを欠かす日はなかったといい、それは「国の食糧庫」と称されたトンガの「豊かさ」の象徴でもあった。トウモロコシが不足している今日、各世帯で自家消費用につくられることは農繁期を中心に月1～2回程度で、1回につき20リットル程つくられ、2～3日間で消費されるのが一般的である。

チブワントゥは自家消費のほか、各種儀礼や社会活動の場で来場者に無料で振る舞われる。主催者の親族や近隣住民の女性が協働で、200リットル容量のドラム缶を用いて生産する。一方、儀礼や共同労働のために各家庭で醸されてきたガンカタが、現在無料で振る舞われる機会は喪明けの儀礼のみで、他の儀礼では醸造女性（世帯）により販売される。

催事	ガンカタ	チブワントゥ
ガンカタ会場（醸造販売女性の自宅）	有料	×
成女式、結婚式（祝宴）	有料	無料
ワークショップ etc.（新しい社会活動）	×	無料
葬式	×	無料
喪明けの儀礼	無料	無料

村の催事で提供される飲料（2011年1月）

成女式などの伝統儀礼で、ガンカタが販売されない場合でも必ず振る舞われるのがチブワントゥである。とくに女性や子供が、競うようにしてその分け前を求める。またチブワントゥは、NGOのワークショップや農業指導会場、選挙キャンペーンといった、村で開かれる比較的新しいイベントでも振る舞われている。これらのイベントや葬式など、酒に酔うことが相応しくないとされる場において、チブワントゥは人びとをもてなすのに欠かせない飲料となっている。

4．女性の現金稼得活動の多様化

ガンカタを女性1人が1回に醸造販売する量は、全盛期の1970～80年代にはドラム缶で平均15～18個分であったが、近年は平均2個分で、酒造を止めてしまった年輩女性や酒造の知識を受け継いでいない若年女性も少なくない。ガンカタ生産量の減少には、トウモロコシ生産の不振に加えて、町の酒（工業的に大量生産される醸造酒・蒸留酒）の普及による需要の低下が大きな要因となっている。ガンカタの醸造販売以外に近年、女性たちは、市がないこの地域において、ガンカタ飲み場や儀礼（祝宴）をはじめ大勢の村びとが集まる多様な機会を利用し、各種生産物・加工品販売を展開している。チブワントゥは、財布の紐が緩んだ人びとへモノを売る「楽しみの場」を盛り上げる重要な要素の一つとなっている。

5．葬式プロセスの簡略化

トンガの葬式は、伝統的には故人を埋葬した後に7日かけて行われていたが、近年では通常4～5日間と短縮されてきている。葬式の短縮化には、HIV／エイズを含め新しい病の影響による葬式数の増加や、弔問者に振る舞う食事に用いるトウモロコシやウシの減少、都市に居住する親族の増加、遠方親族との連絡手段である携帯電話の普及などが要因となっている。また、ムウェヒョ（*Mweesho*）と呼ばれる喪明けの儀礼は、古来より、葬式の数週間から週ヵ月後に催され、そこで用いる弔い酒にはガンカタが用いられてきた。しかし近年、この弔い酒に、醸造に4日かかるガンカタの代わりに一晩で完成するチブワントゥを用いることで、葬式の最終日にムウェヒョを執り行う事例が増加してきている。

6．おわりに

アフリカでは古くから自家醸造による酒が広く飲まれてきたが、市場経済化やグローバル化が急速に進む今日、伝統的酒類全体の後退が指摘されている。トンガの社会においても、ガンカタの醸造は衰退傾向にあり、チブワントゥも各家庭での生産量・頻度は減少してきた。一方でチブワントゥには、近年新たに見られる村びとの社会活動や女性の現金稼得活動の場、伝統儀礼の再編の基盤となる要素の一つとして新たな社会的価値が付与されていた。トンガの伝統的な軽い酒は、酒の役割を補填／代替しながら、現代においても当該社会で重要な機能を果たしているといえる。